『阿波名所図会』における眉山の自然と景観

佐藤 征弥*・池幡 佳織**・浮田 健太郎**・王 艶**・大粟 美菜**・駕田 啓一郎**・加藤 潤**・
木下 悠亮**・杉本 多余**・高橋 将央**・田嶋 孝裕**・原田 克哉**・福本 孝博**・藤永 真大**・
藤本 彩**・光永 雅子**・渡邊 ゆいか**・境 泉洋*・宮崎 隆義*

*徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部、〒770-8502 徳島市南常三島町1-1
E-mail: satoh@ias.tokushima-u.ac.jp
**徳島大学大学院総合科学教育部、〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

Nature and landscape of Mt. Bizan based on "Awa meisho zue"

Masaya Satoh*, Kaori Ikebata**, Kentaro Ukita**, Yan Wang**, Mina Oawa**, Kei-ichiro Kagota**, Jun Kato**, Yusuke Kinoshita**, Sayo Sugimoto**, Masahiro Takahashi**, Takahiro Tajima**, Katsuya Harada**, Takahiro Fukumoto**, Masahiro Fujinaga**, Aya Fujimoto**, Masako Mitsunaga**, Yuika Watanabe**, Motohiro Sakai* and Takayoshi Miyazaki*

*Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, Tokushima 770-8502, Japan.
**Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Tokushima 770-8502, Japan.

Abstract

In this paper the nature and the landscape of the Mt. Bizan are investigated based on "Awa meisho zue" which was a guidebook of Awa (Tokushima) published about 200 years ago. In the picture entitled "Mt. Bizan" a tower at the Jimyoin Temple and two buildings are drawn in the mountain. The mountain is covered with pine trees, and there is a waterfall near the tower. Besides pine trees, three types of trees, Japanese cedar and/or Japanese cypress, trees that presumably cherry, and unknown broadleaf trees are drawn in Mt. Otakiyama that is a part of Mt. Bizan based on the picture entitled "Otakisan Jimyoin". Other historical records in Edo era coincide with the composition of plant species in Mt. Bizan.

Though the vegetation of Mt. Bizan was defended by laws throughout Edo era, it was deforested and the mountain became bald after the Meiji Restoration. Afterwards, it was protected by specifying it as the protection forest and by making it as a park. Now, pine trees and Japanese cedar and/or Japanese cypress have almost been lost, and pasania and live oak are well growing in the mountain. The tower at Jimyoin was burned down by the air raid in the World War II, and the waterfall has thinned. On the other hand, mountain trails and a ropeway were made, and a lot of buildings were built at the top of the mountain. Thus, the nature and the landscape of Mt. Bizan greatly changed in 200 years. However, citizens are still familiar with it as the symbol of Tokushima City.

Key words: Awa meisho zue; landscape; Mt. Bizan; nature, Tokushima; tree; vegetation landscape

はじめに

『阿波名所図会』は、江戸時代後期に庶民の間で旅行ブームが興った時期に作られた阿波の名所を紹介したガイドブックである。同書の巻頭の附言には「文化辛未之歳中冬」とあり、文化８年（1811）に作成されたことが分かるが、今年はそれから200年目にあたる。そこで、本論文では『阿波名所図会』の中から徳島のシンボル眉山について景観や自然の様子がどのように描かれているか分析するとともに、それ以降現在までの変化について調べた。

『阿波名所図会』には阿波の風物が、絵、文章、和歌で紹介されている。特に絵からは地形や建築物や習俗についての情報はもちろんのこと、背景に描かれた自然からも多くの情報を得ることができる。養父は『阿波名所図会』と同時代に作られた３つの名所図絵『江戸名所図絵』『京都名所図絵』『摂津名所図絵』を基に里山の景観やその利用・管理について考察している[1)]。植生景観史研究において絵画資料を基にして植生景観を復元することは、一つの方法となっている。その資料性に関して小椋は、時代や作者により画風の異なる様々なものがあり、それぞれの絵ごとにその方法論は必ずしも一様なものとはならないことを指摘しているが、その上で同時代に同一の場所を描いた他の絵図や文献との比較考察が資料性の検証に有効であると述べている[2)]。そこで、本稿においても『阿波名所図会』を、同時代あるいはその前後の時代の他の資料と照合しながら、『阿波名所図会』から読み取れる眉山に関する情報を検証していく。

なお、本研究は過去２年間実施した徳島大学大学院大学院総合科学教育部の授業「プロジェクト研究Ｉ」で行なった調査に基づいている。同調査は、天正13年（1585）の蜂須賀家入城以降の眉山の景観や山麓の寺社の変遷、水環境の変遷について調べ、その内容は報告書にまとめられている[3, 4)]。本論文は、この調査で扱った資料の一つ『阿波名所図会』に焦点をあて、眉山の景観の変遷について論じたものである。

1．『阿波名所図会』における眉山

1-1．『阿波名所図会』について

安永9年（1780）に京都の名所を紹介した『都名所図会』が刊行されて以来、地方でも古跡や神社仏閣などの由来や物産を詳しく記し、風景画を添えた名所図会が続々と刊行された。『阿波名所図会』のその一つであり、巻頭には、著者である探古室墨海が四国行脚に際に書き留めておいたものを刊行したと記されている。文化9年（1812）正月に私家版として刊行されたものでは、原題が『四国名所図会　阿波之部』となっており、四国全部について出版するつもりであったようだが、結局阿波以外については刊行されなかった[5)]。文化11年（1814）に題を『阿波名所図会』として大坂の本屋を通じて販売されるようになり、弘化３年（1846）版も存在する。文化11年（1814）版を基にして、昭和54年（1979）には歴史図書社から活字版が刊行されている[6)]。

同書の目録によれば上下巻あわせて76箇所の風物を掲載していることになっているが、実際は40箇所あまりで、29枚の挿絵が含まれている。絵を中心とし、当時の見聞に和歌などを添え、伝説や神社仏閣などの由来も記されている。本論文では、眉山の様子が分かる３枚の挿絵「眉山」「大瀧山持明院」「其二 眺望」と、それに付属する文章による説明を基に眉山の景観と自然についてみていくことにする。

1-2．山腹の社について

『阿波名所図会』に「眉山」と題された挿絵がある（図１a）。この絵の主題は、近景に描かれた賑わう新町橋と遠景に描かれた眉山である。山々には名称が記されていて、右から「大滝山」、「眉山」、「勢見山」とある。町は「寺町」「新町」「内町」に名称が付され、他に「新町橋」に名称が付されている。

山々は松に覆われ、大滝山にはその名称のもとになった滝が描かれている。この滝は、現在は水が枯れている。眉山山頂には建造物はない。大滝山に塔が描かれているが、これは後述の持明院境内にあった三重塔である。そして画面中央あたりの山腹には、二つの社が描かれている。この二つの社が何か『阿波名所図会』の中では説明されていないが、目立つように描かれているからには重要だったものだろう。そこで、これらの社が何を描いたものか考えてみたい。

まず手がかりとなるのは、挿絵の右上に付されている説明文である。そこには「眉山　徳島の西にあ

図１　江戸時代の史料における眉山山中、山麓の寺社

a は『阿波名所図会』の挿絵「眉山」。b-e は『御城下絵図』（徳島大学附属図書館蔵）より眉山東側の寺社の部分図である。(b) 富田八幡神社、(c)左が富田八幡神社、右が瑞巌寺、　(d)春日寺、春日社、持明院（山中に三重塔）、(e) 松厳寺。 f、g はそれぞれ『阿波国渭津城之図』（徳島県立博物館蔵）と『阿波国渭津城下之図』（徳島県立文書館蔵）より松厳寺の部分。

り　山形（やまのかたち）眉（まゆ）のごとし　此山北に大滝山 春日の社　南に勢見山（せいみやま）の観音 金毘羅の社　中央に瑞巌寺 八幡宮 元山（がんざん）大師等の霊仏霊社連綿として尊し」と記されていて、眉山の山腹や山麓に並ぶ有力な寺社が挙げられている。これらの寺社のうち勢見山にある観音（観音寺）と金毘羅（金刀比羅神社）については、勢見山は左端の山であり、中央付近に描かれている社とは位置が異なることから該当しない。また、「中央に瑞巌寺　八幡宮　元山（がんざん）大師」と挙げられているもののうち、瑞巌寺と八幡宮（富田八幡神社）は山麓に建っており、挿絵のように山腹に位置していない。同様に「春日の社」（春日神社、春日寺）も麓にあり、山腹に位置していない。残るのは「元山大師」だけである。ところが、「元山大師」という建物は現在眉山にはなく、かつてそういう名称の寺社が存在したこともない。

元山大師とは、天台宗中興の祖といわれる慈恵大師良源上人の別名であり、おそらくこの「元山大師」は廃寺となり、現在は存在しない松厳寺のことを指している。『阿波志』には、松厳寺の境内に元三大師を祀った元三堂があったことが記されている[7]。松厳寺は、承応元年（1652）に大猷院（徳川家光）の廟として建立された。松厳寺が後発の寺院でありながら眉山中腹に広大な境内を構えることができたのは、東照宮の一つであったからであろう。寛文５年（1665）に作成されたとされる『阿波国渭津城之図』[8]や天和３年（1683）に作成されたとされる（それ以前の可能性もある）『阿波国渭津城下之図』[9]をみると、松厳寺が特別立派に描かれている（図１f、g）。これら二つの絵図では、松厳寺の社が山中に建っているのかはっきりとは分からないが、享保年間（1716-1735）に作製されたとされる『御城下絵図』[10]では山中にあることが確認できる（図１e）。よって挿絵「眉山」に描かれた社の一つは松厳寺の可能性がある。松厳寺は明治に入り大名の庇護がなくなった結果、明治６年（1873）に廃寺となった。現在、松厳寺のあった所は霊園になっている。

もう一つの社については、挿絵右上の説明文に挙げられている中には、これに該当するものがない。しかし、山中にあることからすると、現在の八阪神社の可能性がある。八阪神社は持明院の境内にあり、『阿波名所図絵』の挿絵「大瀧山持明院」の中にも描かれていて、そこでは「ぎおん」と記されているように当時は祇園社であった。明治の神仏分離により持明院は廃絶し、その際に祇園社は八阪神社と改称された。『阿波名所図絵』の文章中でも、祭礼の際は「寺中寺外市（いち）をなして賑わふこと ををかたならず」と描写されているように人々の信仰を集め、挿絵にこれを描いているとしても不思議ではない。しかし、二つの社を松厳社と祇園社と速断するには問題が残る。挿絵では二つの社は近い位置に建っているが、実際の松厳寺と祇園社の距離はもっと離れているからである。しかし、絵に描かれた眉山の形自体に実際とは異なる点があるし、滝や社は強調して大きく描かれていることから、絵中での距離は必ずしもあてにはならない。

挿絵に描かれた社や挿絵中に付された説明文に登場する寺社に加えて、現在は勢見山の山中に忌部神社が、山麓には眉山町に天神社が、伊賀町に国瑞彦（くにたまひこ）神社が立地している。忌部神社が現在地に建てられたのは明治25年（1892）のことであり、『阿波名所図会』の刊行時には存在してなかった。これに対して、国瑞彦神社は文化３年（1806）、天神社は文化６年（1809）に創建されており、ともに『阿波名所図会』が刊行される前のことである。国瑞彦神社は藩祖家政を神格化し、「国瑞彦明神」の神号を授与してこれを祀った。境内もそれに相応しい規模に造営されており[11]、『阿波名所図会』に登場していてもおかしくはない。同書にとりあげられていない理由は不明だが、可能性の一つとして、著者探古堂墨海が徳島を訪れた時期には創建されていなかったことが考えられる。『阿波名所図会』の巻頭には、探古堂墨海がこれを作成した経緯について、四国を旅行した時に個人的に写した風景を、人の求めに応じて世に出すことにしたと記しているが、訪れた時期は記されていない。探古堂墨海がいつ阿波を訪れたのか、今後の研究課題の一つである。

1-3.　大滝山持明院

図２aは「大瀧山持明院」と題された挿絵であり、持明院の境内の様子が描かれている[12]。そしてそれに続く挿絵「其二 眺望」では、持明院から徳島を見下ろした風景が描かれている（図2c）。この二枚の挿絵には、他の絵には見られない興味深い特徴があ

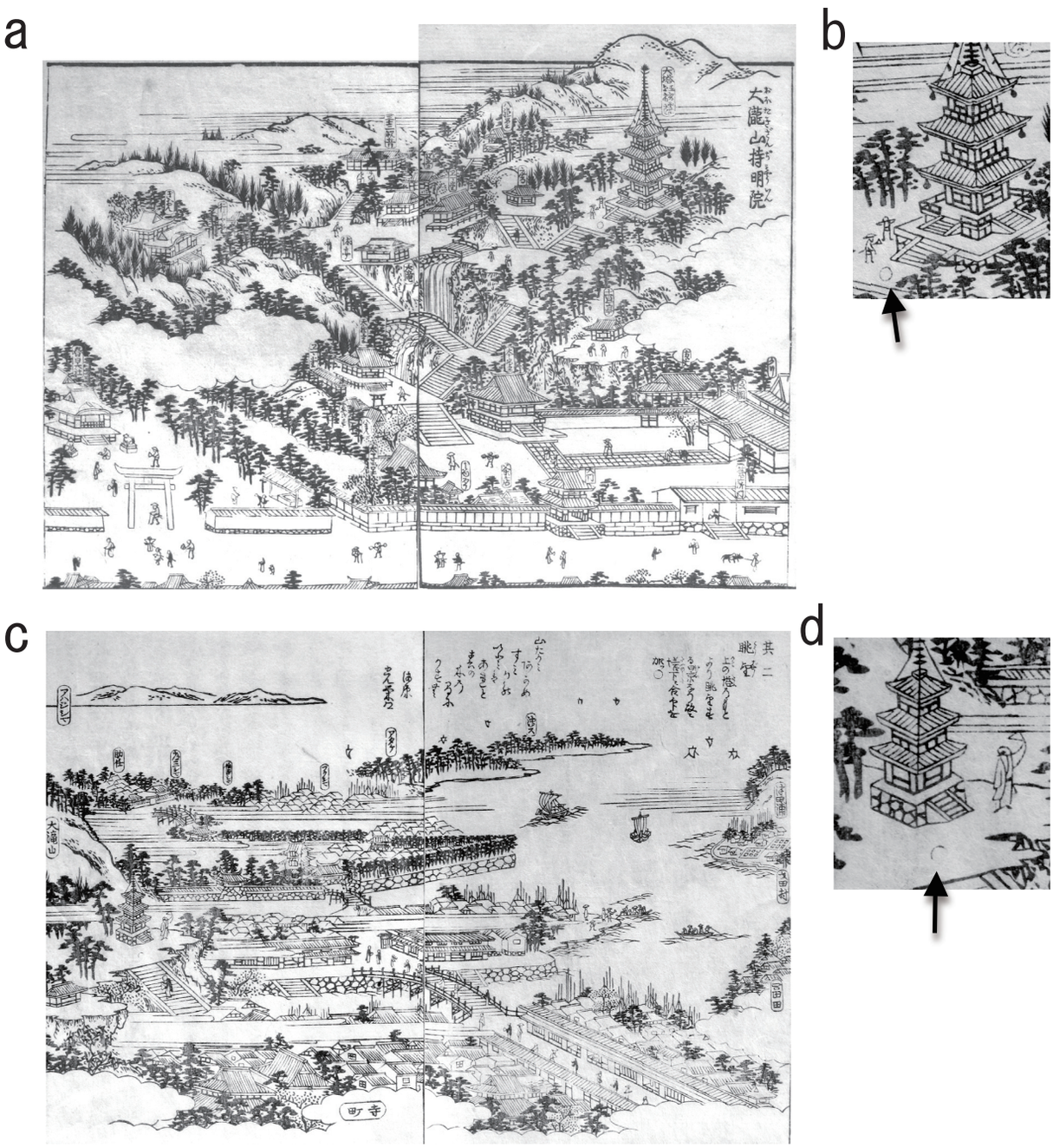

図２　『阿波名所図会』における持明院と城下の町並み

a)挿絵「大瀧山持明院」。b)挿絵「大瀧山持明院」の三重塔の拡大図。c）挿絵「其二」。d）挿絵「其二」の三重塔の拡大図。矢印で示すように三重塔の下に○が印されている。

る。それは実際の風景とは無関係に、両方の絵の三重塔の下に〇印が書き込まれていることである（図２b、d）[13]。この〇印は何であろうか。

挿絵「大瀧山持明院」の後に付された文章には、「山頭に大塔あり　此所の眺望は殊に絶景なれば別に図せり」と、次の「其二 眺望」が三重塔からの眺めであることが記されている。そしてそれに対応する挿絵「其二 眺望」の右上には「上の塔のもとより眺望する景なり　ゆゑに塔の下に合印を加ふ〇」と〇印の意味が文章で説明されている。「上の塔」とは、一つ前の絵図「大瀧山持明院」に描かれている三重塔のことである。合印というのは２枚の絵の塔が同じものであることを示すために付けた印という意味である。印をつけた目的は、挿絵「其二 眺望」が、三重塔からみた眺めであると言っているわけだが、絵を見れば作者の視点の位置が、まったく別の所にあることは一目瞭然であり、奇異に感じられる。

『阿波名所図会』には「眺望」という名の付いた挿絵が他に二つ存在する。一つは「日峯眺望」と題された絵で、文章による説明には「日峰権現」（現在の小松島市中田町の日峰神社）からの眺望が描写されている。もう一つは「津峯の眺望」と題された絵で、同様に文章による説明に「津峰権現」（現在の阿南市津乃峰町の津峯神社）からの眺望が描写されている。しかし、どちらの絵においても神社よりかなり高い位置から鳥瞰した構図であり、それぞれの神社も描かれている。つまり神社からの眺望と断っていても、絵の視点の位置は違っている。このような構図は、大滝山持明院からの眺望の絵と共通する。しかし、「日峰権現」や「津峰権現」には、視点の位置がそこであることを示す印を神社に描いていない。わざわざ描かなくても分かることであり、描く必要がないからである。ところが、持明院からの眺望では、絵の中に〇印を入れるという不自然なことをしている。これは、三重塔からの眺望であることを強調しなければならない理由があったと考えられる。そうだとしたら、その理由というのは、眉山が登ってはならない山であったためではないだろうか。

眉山は、徳島藩の初代藩主蜂須賀家政が天正 13 年（1585）に阿波国に入部し徳島に城下町を建設した後、防衛の兵站地とするため藩は眉山の山麓に次々と寺社を配置した[14]。そして境内を殺生禁断、草木の伐採禁止、土石の採掘禁止などの措置を講じて、庶民が山へ入ることを抑えていた[15]。眉山は登ってはならない山であった。多田は『佐古諏訪山考』において、その理由を、防衛のため、山に登り徳島城を見下ろすのは不遜と考えられたため、山火事を防ぐため、としている[16]。

『阿波名所図会』以前には、眉山から町を見下ろす風景を描いたものはみあたらない。しかし、『阿波名所図会』刊行後間もない文政８年（1825）に、藩主の命により作成されたと考えられる「眉山絶頂より御山下眺望」という真景図が作られており[17]、『阿波名所図会』よりはるかに正確に城や町並みが描かれている。これが作られた背景には『阿波名所図会』の刊行が影響しているのかもしれない。

1-4.　市中の自然景観

『阿波名所図会』では、持明院の三重塔からの眺めについて、「はるかに望みみれば徳嶋・福島など島々長閑にかすみ、岸をめぐる波松の風は、君が千年をよばふなるらん。富田の渡には舟をよびてかしましく、中洲の水鳥の群あそぶは己がさまさま世をたのしみがほなる。才田の濱の塩竈の烟はにぎをふ竈戸のむかしおもほゆ。津田浦の釣舟は、ながき日のくるるををしみ、安宅沖の洲の松のはやし海原とをくさしいでて、もろこしまでも陸わたりさすかも。」とある。中洲は、現在の中洲町にあたる地域で、当時水鳥の群れが見られたことが分かる。そして安宅やその先の沖洲には、松林が海岸線まで続いていたことが分かるが、現在この辺りは開発されて松林はほとんどなくなっている。

この部分の記述は、江戸末期から明治期に活躍した旅行家松浦武四郎が、天保7年（1836）に記した『四国遍路道中雑誌』[18]の中で徳島の様子を描写したものとよく似ている。松浦は、持明院に立ち寄り、その様子について「祇園の社は森陰たる樹の中ニ立て給ひし。休亭是より一ツの瀑布を眺むニ数仞の岩壁ニ一道の瀧有。其瀧の上と下に橋有。上下より眺むによろし。如何ニもかゝる繁華の地ニかゝる名瀑のあること不思儀とやいわん。」と記している。さらにそこからの眺望について、「此處より東を望めば眼下ニ二十四ヶ之寺を眺、城内を一望し、沖の洲は海原ニさし出、冨田ニは漁舟常に棹さし、才田ニは鹽焼烟雲ニなびき、淡路、紀伊の国は手ニとる斗

ニミえ、其眺望いわんかたなし。」と眺めの素晴らしさを記している。『阿波名所図会』との共通点として、滝が登場すること、沖洲が海に向かって突き出した地形であること、富田は船が頻繁に行き来していること、才田の塩田について触れていることが挙げられる。才田の塩田について『阿波名所図会』では「塩竈の烟」、『四国遍路道中雑誌』では「鹽焼烟」と表現が使われているが、これらは「塩を焼く煙」の意味である。当時才田では、塩田による製塩が盛んに行なわれていることが分かる。『阿波名所図絵』の挿絵「眺望」でも才田に塩田が描かれている。この才田の浦での塩田は、元和６年（1620）二代藩主蜂須賀忠英の命により干拓された[19]。塩田は太平洋戦争時まで現在の昭和町８丁目（旧斎田東開）にあった。紛らわしいのだが、鳴門市撫養の斎田のあたりも塩田による製塩業が盛んであり、慶長時代から始まった製塩業が現在も続いている。大正時代には全国の塩の生産の１割をこの地で占めるほどであった。「斎田塩」と呼ばれ全国的に有名になったのは鳴門の斎田の方であるが[20]、『阿波名所図会』の鳴門を描いた挿絵や文章中には塩田は登場していない。『阿波名所図会』では他に、「津峯の眺望」と題された挿絵において現在の阿南市の打樋川河口の浜辺に塩田が広がっている様子が描かれている。

1-5. 挿絵中の樹木から分かる植生

『阿波名所図会』の挿絵の中で、「矢上の楠」と「北山桜」（同名の２枚のうち１枚）の２枚は、著名な巨樹を描いたものである。「北山桜」には徳島市北山町にかつてあったサクラの巨樹とその下での花見の様子が描かれている。このサクラは明治８年（1875）に伐られて、現在は存在しない。「矢上の楠」は、藍住町矢上の春日神社境内に現在も存在する徳島県指定天然記念物のクスノキである。現在のこの樹は、火災や台風による被災により『阿波名所図会』当時の面影はほとんどないが、この樹を『阿波名所図会』と同一の角度で撮影した大正期の写真と比較すると特徴がよく一致しており、『阿波名所図会』の著者探古室墨海がこの樹の姿を正確に描写していることが、佐藤により指摘されている[21]。

これら巨樹の主題に描かれた挿絵以外でも、背景に描かれた植物から樹種をある程度推測することができる。松は、29枚の挿絵のうち25枚に登場し、海浜を描いた絵では全てに描かれている。挿絵「大瀧山持明院」には、松を含めて４種類の樹が描かれている。まず、山中に松が生い茂っていることが分かる。松の他に、山中には筆を上向きにしたような形の針葉樹が茂っている。これと同じ樹は、山を描いた挿絵にしばしば登場する。挿絵「舎心山太龍寺」では、山中にこの樹が優先している（図３a）。太龍寺の境内は現在、杉や檜の古木で覆われており、『阿波名所図会』においても杉または檜を描いていると考えられる。これを確かめるために、さらに別の史料と比較してみよう。前に述べたように、同時代に同一の場所を描いた他の絵図や文献と類似性が認められればその情報の確実性が増すからである。

江戸らは、江戸時代に四国霊場を紹介した二つの史料『四国偏礼霊場記』と『四国遍札名所図会』[22]の絵を比較し、境内に描かれた樹木の共通性を指摘している[23]。この二つの史料と『阿波名所図会』では、太龍寺が共通して描かれている[24]。『四国偏礼霊場記』では太龍寺境内に、松の他にこの尖った針葉樹が描かれている（図３b）。同書の焼山寺の絵を見ると参道に現在も残る杉並木が描かれており、さらに弘法大師ゆかりの杉の神木も同様に描かれていることから、杉をこのように描いていることは明らかである。ただし、檜をはじめ、杉と似た樹形の樹種についても、わざわざ区別して描く理由はないので、杉と同じような描き方をしていると考えられる。そこで、本稿ではこのような形の樹を以下「杉・檜」と表記することにする[25]。

もう一つの史料『四国遍札名所図会』は、江戸時代後期、『阿波名所図会』より少し前に作製されているが、それの太龍寺の様子は、境内が「杉・檜」で被われていることが分かり（図３c）、『阿波名所図会』の様子と一致する。また、『四国遍札名所図会』には眉山の南端の勢見山を描いた挿絵がある（図３d）。勢見山には八十八ヶ所札所の寺院はないが、文章の記述から作者は金毘羅大権現（現在の金刀比羅神社）に寄っていることが分かり、絵中にも鳥居が描かれているので、この絵が金毘羅大権現を描いたものだと判断できる。山中の樹は、松が最も多く描かれており、杉・檜も所々に見られ、『阿波名所図会』の眉山を描いた様子と一致する。この他に、石段に挟まれた斜面が３段に整地され、幹の太い樹が整然と植

えられていることが分かるが、樹種は不明である。また、その左の斜面には葉を点状に描かれた樹種がたくさん植えられていることも分かる。これも樹種は不明であるが、後で述べるようにこの樹の描き方は『阿波名所図会』の桜の描き方と類似している。このように松、杉・檜の描き方やそれらの分布について三つの史料で共通点が見られることから、『阿波名所図会』の挿絵から当時の植生をある程度推測することが可能であると言える。

『阿波名所図会』の挿絵「大瀧山持明院」には、山中や境内に松と杉・檜の他に、広葉樹が２種類描かれている。一つは葉が点状に描かれたタイプで、建物の周囲によく描かれている。もう一つはそれよりも葉がやや大きく描かれたタイプで、太子堂と祇園社の側に描かれているのみである。これらの樹種が何かは不明だが、点状の葉の広葉樹は、挿絵「北山桜」に描かれている桜と描き方は同じである。『阿波国渭津城之図』中の松厳寺境内にも、これと同じような樹が赤色で描かれているが（図１f）、『阿波国渭津城下之図』ではもっと丹念に描かれていて、色や形から桜であることが分かる（図１g）。葉のやや大きな広葉樹は、他の挿絵においてケヤキをこの

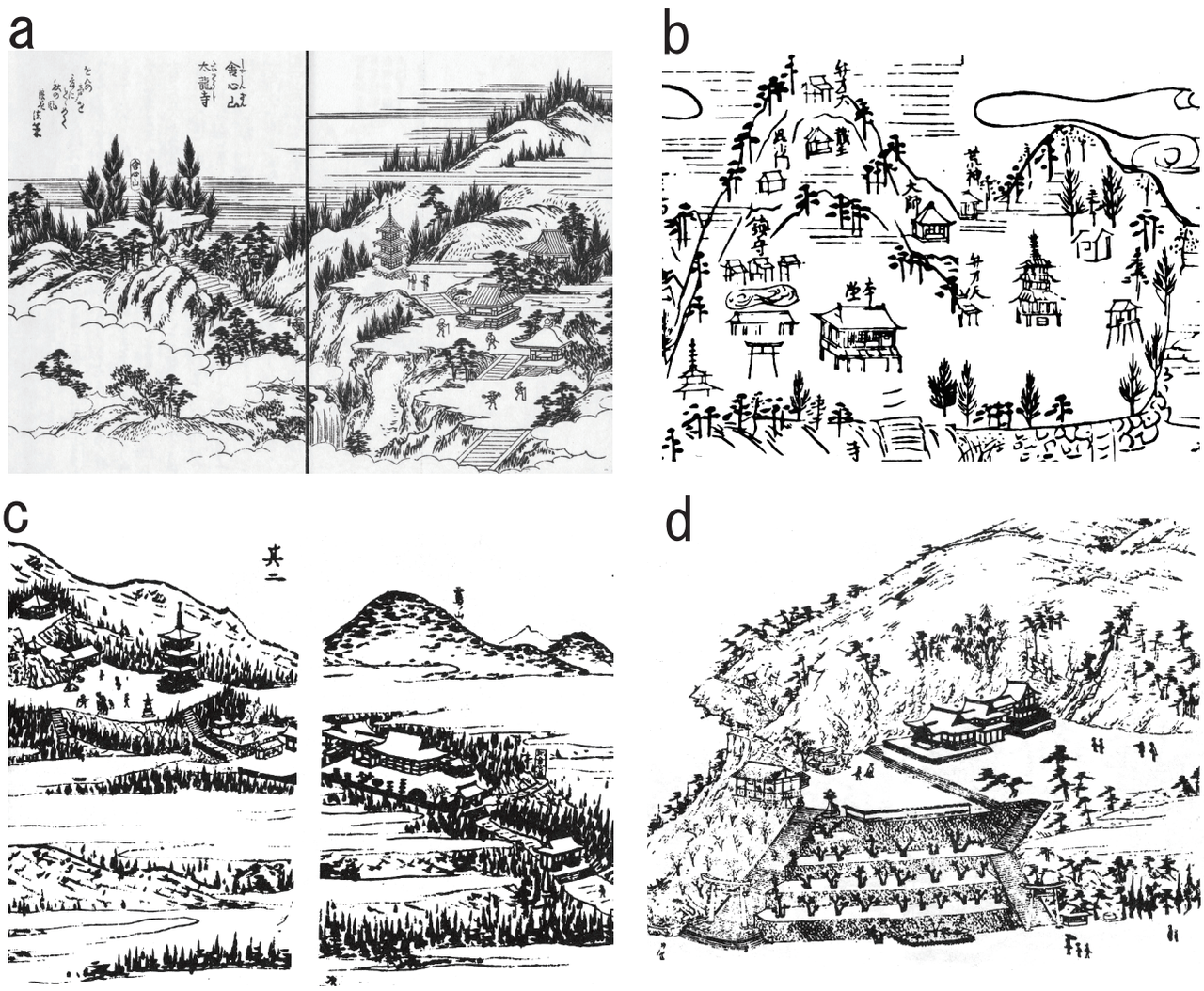

図３　江戸時代の絵における山の樹の比較

a)-c)はそれぞれ『阿波名所図会』、『四国遍礼霊場記』、『四国遍礼名所図会』に描かれている太龍寺境内 、d）は『四国遍礼名所図会』に描かれている勢見山。

ような描き方をしている例があるが、挿絵「大瀧山持明院」においてもケヤキかどうかは分からない。挿絵「其二 眺望」では、大滝山山中には松と杉・檜、広葉樹２種が描かれており、挿絵「大瀧山持明院」と同じである。市中には杉・檜は見られず、松と広葉樹２種がみられる。挿絵「眉山」では山中に松しか描かれていない。町中には葉のやや大きな広葉樹が１本描かれているのみである。

これらを総合すると、江戸時代の絵から分かる眉山は、松に杉・檜が混じる森林であり、寺社の境内に桜を含む広葉樹が植えられていたと言える。境内地以外でも山中に広葉樹が生えていたと思われるが、描かれていない。

2. 明治以降の眉山の変遷

先に述べたように、江戸時代は寺社の境内での草木の伐採が禁止されており、眉山の植生は守られていたが、明治に入ると一変する。大正５年（1916）版の『阿波名勝案内』[26] には、眉山について「維新の際斧斤を容れて満山を禿赭（とくしゃ）に化けしめ、また見る影もなきに至れり」と記されている。明治維新後に伐採されて禿げ山となったのである。しかし同書では、その後保安林に指定して保護に努め、眉山公園として山道も整備したことも記されている。

大正期から太平洋戦争前の間に作られた古絵葉書「徳島・新町橋」[27] を見ると、眉山は木々で覆われており、禿げ山だった時代は過去のものとなっている（図４a）。樹種は判然としないが、広葉樹が主であり、松や杉・檜は目立たたず、江戸時代に松や杉・檜が描かれていた山とは様子が一変している。この写真の右上隅にこの三重塔が写っていて、新町橋と一緒に三重塔を写真に収めようとアングルを工夫して撮影されたと思われるが、持明院が廃寺となった以降も三重塔が徳島市の重要なシンボルの一つであったことが伺われる。

また、同時期の別の古絵葉書「新町橋と眉山」[27] では、山腹に白く桜並木が、筋状に延びているのが分かる（図４b）。大滝山は、持明院が廃寺になった後、明治中頃から公園として整備され、桜の植樹により桜の名所となった[28]。昭和12年（1937）の『大徳島市勢大観』[29] では持明院跡の三重塔付近と八阪神社の周囲、天神社奥の「花のトンネル」と記された辺りが赤色で示されており、そこにサクラが多数植えられていることを示していると思われる（図４c）。現在でも大滝山は花見の場所として親しまれているが（図４d）、桜の数は減り、絵葉書「新町橋と眉山」のようにサクラの筋が山腹に浮かび上がる光景は見られない。現在、NPO法人「眉山を桜と花の名所にする会」が桜や広葉樹の植樹に取り組んでいる。

昭和45年（1970）に刊行された『天然記念物緊急調査報告書』には、「眉山の自然林」が「学術上価値の高い生物群集および生物の所在地」の一つに挙げられており、その様子について「眉山の勢見山から山手町を経て南佐古に至る一帯には疎生するアカマツに混入して常緑広葉樹の二次林がよく発達し、中でも新町小学校裏には見事なシイの残存林がある。またこの全山は鳥獣保護区に指定せられ、動植物の自然地域として、市民の保健上や景観的にもぜひ保存したい。」と記されている[30]。

昭和53年（1978）に実施された第２回自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）特定植物群落調査報告書[31] によれば「眉山は、徳島市の中央に横たわる低山で、その多くは、アカマツ林でおおわれるが、勢見から新町を経て佐古に至る間は、アカマツから常緑広葉樹林へと、天然更新の途中相がみられて珍しい。」とある。また同資料には瑞巌寺社叢が「眉山の暖地性植物群落」としてリストアップされており、高木層および亜高木層の優先種はスダジイ、低木層の優先種はミミズバイであると記されている。他の種類として高木相にはヤマモモ、イヌシデ、亜高木層にはヤブツバキ、ミミズバイが見られるとある。

現在の景観はどうであろうか。全国的なマツ枯れにより、徳島県の森林のマツは激減し、眉山も例外ではない。平成16年の『徳島県環境基本計画（資料編）』では、かつて県北部に広がっていた山地のアカマツ林は、ほとんどのアカマツが枯れてコナラ林に変わってしまったことが指摘されている[32]。明治維新後の伐採で大きく数を減らした眉山の松は、マツ枯れによりさらにその数を減らしたことが分かる。同資料によれば、徳島県の自然植生は、気候帯からみると海抜1000 m付近まではヤブツバキ域にまとめられる照葉樹林であり、その中で眉山の自然植生は、さらに「シイ - タブ林」に分類され、高木層をスダジイが優先し、低木層にミミズバイが混成する

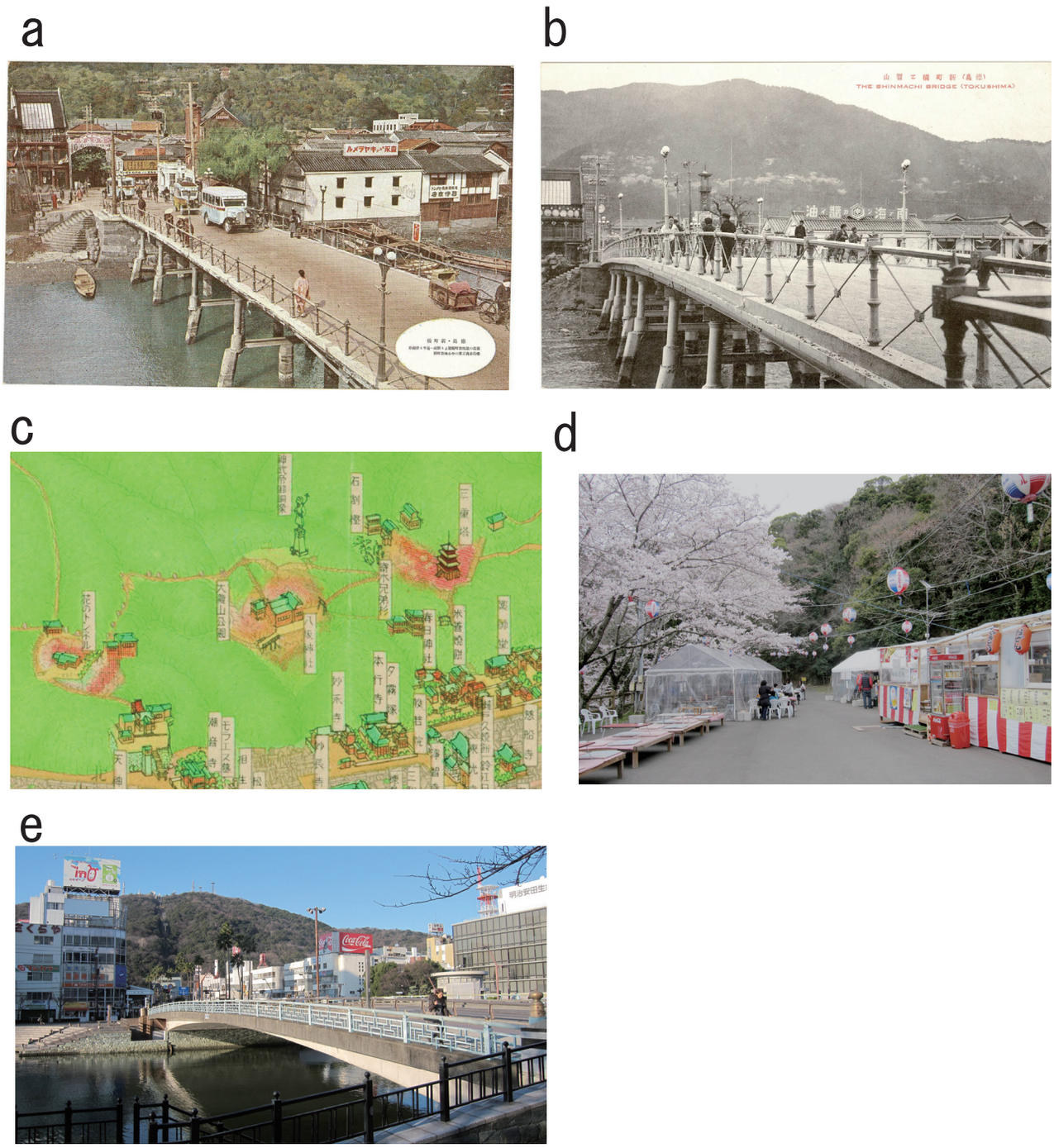

図４　大正以降の眉山の様子

a)古絵葉書「徳島・新町橋」。b)古絵葉書「(徳島) 新町橋と眉山」。c) 『大徳島市勢大観』部分図。d) 現在の大滝山公園の桜並木での花見の様子 (2011 年４月３日撮影)。e)新町橋たもとから見た現在の眉山の様子 (2011 年１月４日撮影)。

「ミミズバイ - スダジイ群集」が見られるとしている。眉山に広がっていた松林は、人間の影響下で自然植生の代償植生として成立していたものである。

このように昭和中期以降は、杉・檜はまったくみられず、マツも減少していった。代わりにスダジイやコナラが増加している。

現在の眉山の姿を、『阿波名所図会』の挿絵「眉山」（図１a）や古絵葉書「新町橋と眉山」（図4b）と同一アングルで撮影した写真が図４eである。市中にビルが立ち並び、山の稜線がビルに隠れている部分が多くなった。また、麓と山頂を結ぶロープウェイに沿って木が伐られている筋がくっきりと刻まれている。山頂には剣山神社、パゴダ、モラエス館、ロープウェイ発着場、電波塔などが並ぶ。平成22年（2010）には、山頂に国内最大級の「ＬＥＤ万華鏡モニュメント」が設置され、200年前の眉山と比べるとその様相は大きく変化している。

終わりに

以上述べてきたように『阿波名所図会』の挿絵に描かれた200年前の眉山と比べると、山を覆っていた松はわずかになり、替わりに広葉樹が茂っている。山腹に描かれた滝は枯れ、三重塔は焼失し、元三大師（松厳寺）は廃寺となり、八阪神社も参拝する者が激減してしまった。しかし、昔と同じく眉山は徳島市のシンボルとして市民に親しまれている存在である。 健康増進やリクリエーションの目的で山道を歩く人が絶えない。山頂に登ることができなかった江戸時代に比べて、現在は山頂までの登山道やロープウェイが整備され、かつて何もなかった山頂には様々な施設ができ、眉山がより身近になった面もある。

徳島市が平成12年（2000）及び平成21年（2009）に実施した市民アンケートにおいて、将来に残したい場所・風景を尋ねたところ、眉山はいずれの年も２位に挙げられている[33]。日頃目にする眉山が市民にとって大きな存在であることが伺われる。そして眉山の自然は、江戸時代に寺社の境内地を伐採禁止して守られ、明治期に開発により失われた時期もあったが、保安林、風致地区、鳥獣保護区に指定され、将来に残すべく保護に務めている。

註

1）養父志乃夫.『里地里山文化論（上） 環境型社会の基層と形成』. 農山漁村文化協会. 95頁（2009）

2）小椋純一.「絵図類の考察からみた江戸末期から室町後期における京都近郊の植生景観」. この論考は『京都府レッドデータブック』に収められている（http://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/eco/rs/rs03.html）。『京都府レッドデータブック』は、京都府が絶滅の危機に瀕している野生生物種の現状を取りまとめたデータであり、平成 14 年 6 月に発表された。ホームページ版、普及版、CD-ROM 版が出されている。

3）池幡佳織、王艶、加藤潤、木下悠亮、杉本多余、福本 孝博、藤本彩、光永雅子、境泉洋、佐藤征弥、宮崎隆義. 「徳島の自然環境と歴史・文化～ 眉山山麓の寺社の興隆と衰勢、湧水について」.『平成 21 年度プロジェクト研究報告書』. 徳島大学大学院総合科学教育部. 30-38 頁（2010）

4）浮田健太郎、大粟美菜、駕田啓一郎、高橋将央、田嶋孝裕、原田克哉、藤永真大、渡邊ゆいか、境泉洋、佐藤征弥、宮崎隆義.「変わりゆく徳島の姿 ― 眉山、新町橋、水路、狸信仰について」.『平成22年度プロジェクト研究報告書』. 徳島大学大学院総合科学教育部. 1-10頁（2011）

5）赤松万里、板東則子、溝口陽子、小林美帆、加藤正彦、森勇樹、棚上靖代、日吉淳、磯崎好則、鎌田政司、安宅加代子、森清隆、藤岡値衣、永田美代子、後藤美映子『『阿波名所図会』の研究』. 鳴門教育大学言語系（国語）教育講座 赤松研究室（2000）

6）本論文では図の掲載には徳島大学図書館所蔵の文化11年（1814）版を用いている。文章の引用には、歴史図書社による昭和54年（1979）の復刻版を参考にした。

7）藤原之憲による阿波藩の地誌『阿波志』（文化12年（1815））には松厳寺について「幕府公廟あり」そして「堂あり元三大師書像を納む」と記されている。ここでは昭和51年（1976）に歴史図書社が復刻

したものを参考にした。

8）『阿波国渭津城之図』は、松浦菊男氏所有であり徳島県立博物館で委託管理している。徳島県立博物館にて閲覧した。作成年代については、徳島市立徳島城博物館編集・発行『徳島城下絵図 図録』(2000)を参考にした。

9)『阿波国渭津城下之図』は、国文学研究資料館史料館所蔵（蜂須賀家文書1228-1）であり、徳島県立文書館が所有する複製を閲覧した。作成年代については、徳島市立徳島城博物館編集・発行『徳島城下絵図 図録』（2000）を参考にした。

10）『御城下絵図』は徳島大学付属図書館蔵（整理番号49）
を閲覧した。作成年代については、徳島市立徳島城博物館編集・発行『徳島城下絵図 図録』（2000）を参考にした。

11）『徳島市史』には国瑞彦神社の規模について「藩祖家政を祭るのに相応しく、鳥居・拝殿・幣殿・中門が置かれ、その奥に三方を玉垣に囲まれた本殿を安置する荘厳な構えであった。また城の枡形を思わせるような石垣と堀をめぐらし、武具庫のような土蔵と神輿庫が配置され、祭礼時には槍・薙刀・火縄銃などの武具を立ち並べていた。」と記されている。徳島市史編さん室.『徳島市史 第四巻 教育編・文化編』.徳島市教育委員会. 1093 頁（1993）

12）持明院の歴史およびその廃寺以降の大滝山の歴史については、次の詳しい調査報告があるので本論文では触れない。藤目正雄、藤岡道也、山本武男、大崎真兄、別枝治、木村晴夫、河野幸夫. 「大滝山（旧持明院の周辺）調査」. 総合学術調査報告「徳島」郷土研究発表会紀要 第 15 号. 165-183 頁（1970）

13）挿絵「其二　眺望」では○が一部欠けていて分かりづらい。歴史図書社版では完全に分からなくなっている。また、同書には、文章の部分のみを別にまとめた活字の冊子が付属しているが、そこにも「合印を加ふ○」の部分に○印が付されておらず、この印の意味に気づかなかったものと考えられる。

14）徳島市史編さん室.『徳島市史 第四巻 教育編・文化編』. 徳島市教育委員会. 1091 頁（1993）

15）神河庚蔵 編. 『阿波国最近文明史料』. 臨川書店（1973）

16）宮崎晴雄、西條史朗、豊川卓、多田茂信.『佐古諏訪山考』多田茂信発行. 51 頁（1995）

17）徳島市立徳島城博物館編集・発行『徳島城下絵図 図録』（2000）を参照した。

18）『四国遍路道中雑誌』は 天保 7 年（1836）、松浦武四郎が 19 歳の時の四国八十八ヶ所霊場紀行をまとめた三巻からなる草稿で、弘化元年（1844）に郷里の伊勢で書かれている。ここでは吉田武三編『松浦武四郎紀行集（中）』（昭和 50 年、冨山房発行）を参照した。

19）平凡社地方資料センター. 『徳島県の地名（日本歴史地名大系第37巻）』. 459頁（2000）

20）江戸時代を通じて、江戸に最も多量に送られたのは「赤穂塩」と並び「斎田塩」であった。また、大正から昭和初期の塩の生産高は、撫養の生産が全国の7-9%を占めていた。『鳴門市史 下巻』鳴門市史編纂委員会編集、鳴門市発行. 3-263頁（1988）

21）佐藤征弥. 「矢上の大クスの歴史」. 徳島大学総合科学部人間社会文化研究 13 巻. 31-60 頁（2006）

22）元禄2年（1689）に作られた『四国偏礼霊場記』は、各札所の見取り図と由来などを記した本で、真念が長年の経験で得た資料や情報を提供し、依頼を受けた寂本が彼の学識に基づいてそれらをまとめたものである。『四国遍札名所図会』も同じく四国霊場の道中記録であり、作成者は不明であるが、遍路を行なった時期は寛政12年(1800)とされている。本論文では二つの史料とも伊予史談会編『四国遍路記集』（1981）に収められているものを参考にした。

23）江戸梢、藤原久美子、横田由紀、小野田協子、葭森健介、平井松午、佐藤征弥.「四国霊場と自然 - 神木、自然景観、寺紋について」. 徳島大学総合科学部自然科学研究 22 巻. 122-140 頁（2008）

24)『四国遍礼名所図会』と『四国遍礼霊場記』には、太龍寺が「大龍寺」と表記されている。

25）絵師が樹を意識的にいくつかのタイプに描き分けている場合でも、絵自体から正確な樹種を特定することは難しい。同一地域における現在の植生あるいは同時代の他の資料との比較から判断することになる。例えば『葛川絵図』では樹林を常緑針葉樹、常緑広葉樹、落葉広葉樹、萌芽林の４つのタイプに分類され、常緑針葉樹には現存の植生との対比からスギ、ヒノキ、モミ、ツガなどが含まれるとしている（下坂守、長谷川孝治、吉田敏弘.「葛川絵図」. 葛川絵図研究会編.『絵図のコスモロジー（上）』.地人書房. 48-112頁（1988））。また、四国八十八ヶ所巡礼地を一枚の絵に収めた巡礼絵図である四国遍路絵図を分析した田中は、樹の描き分けを「松」「杉」「それ以外」としており、針葉樹を杉として檜の可能性を考慮していない（田中智彦.「四国遍路絵図と弘法大師図像」. 葛川絵図研究会編.『絵図のコスモロジー（下）.地人書房. 239-256頁（1988））。本稿では現存の植生との対比から描かれた針葉樹を「杉・檜」とした。

26）石毛賢之助著『阿波名勝案内』は明治 41 年（1908）に黒崎書店から刊行され、大正５年（1916）に改訂版が阿陽新報社から刊行された。昭和 54 年（1979）に歴史図書社が大正５年版を再刊行し、本論文はそれを参考にした。大正５年版には「眉山公園」という項があり、本文中に紹介した文章は、それに依っているが、明治 41 年版にはこの項目及び文章がない。

27）『徳島県立文書館の企画展「歴史写真でよみがえる徳島の姿」が平成 22 年 10 月 26 日から平成 23 年 1 月 23 日にかけて開催され、展示された写真の画像ファイルを、承諾を得ていただいたものである。本論文では２つの古絵葉書「徳島・新町橋」（整理番号 S200400466）および「新町橋と眉山」（整理番号 48-S200400036）を掲載した。いずれも撮影年月日は不明である。

28）ふるさと徳島編集委員会.『ふるさと徳島』. 徳島市市民生活課. 18 頁（1988）

29)『大徳島市勢大観』. 徳島日日新報社刊（1937）. 24）と同じく徳島県立文書館の企画展「歴史写真でよみがえる徳島の姿」に展示された写真の画像ファイルを、承諾を得ていただいたものである。

30）徳島県教育委員会編集・発行.『天然記念物緊急調査報告書』. 31 頁（1970）

31）環境庁.『日本の重要な植物群落（四国版）』. 大蔵省印刷局（1979）

32）徳島県県民環境部環境局環境企画課.『徳島県環境基本計画（資料編）』. 徳島県. 89 頁（2004）

33）平成12年（2000）及び平成21年（2009）の２回のアンケート調査で、いずれの年も１位が吉野川、２位が眉山、３位が城山となっている（徳島市市民環境部環境保全課編『第２次徳島市環境基本計画』、23頁（2010））。

論文受付：2011年７月６日
改訂論文受付：2011年９月９日
論文受理：2011年９月16日